

香港における実践研究共同体の形成を目指して—

細川英雄・三代純平（編）

『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』

To build the community of jissen kenkyu (action research) in Hong Kong

瀬尾匡輝

茨城大学

本書はそのタイトルが示すように、実践研究とは何なのか、そして実践研究は何を目指すのかという問いに真摯に向き合っている。私は、読者に語りかけるような調子で書かれた各論考に引き込まれ、「なるほど」と赤ペンで下線を引いたり、コメントを書きこんだり、「そうだ！ そうだ！」とエールを送りながら読み進め、気が付けばこの本を1日で読み終わってしまうほど引き込まれていた。私は、この『日本學刊』の読者にも本書をぜひおすすめしたく、書評を書くことにした。

本書は、理論編と実践編の2部構成で計10章ある（理論編4章、実践編6章）。理論編の第1章では、日本語教育の主要刊行物で公表されてきた実践研究の論文を歴史的に振り返り、実践研究が日本語教育分野においていまだコンセンサスが得られておらず、これまで日本語教育研究の中で周縁化されてきたことを明らかにしている。その上で、筆者らは、既存の枠組みに実践研究を当てはめてモデル化するのではなく、実践研究から既存の日本語教育研究や実践に働きかけ、新たな枠組みを構築していくことの重要性を主張している。

それに続く第2章では、教育分野と言語教育分野（英語教育・日本語教育）でなされてきたアクションリサーチの議論を援用しながら、筆者らが実践研究をどのように捉えるのか「立場表明」（p.344）を行っている。それによると、アクションリサーチは元来「ある社会的、政治的な立場から状況を改善していく実践」（p.50）であった。だが、日本語教育に取り入れられる過程でその要素が薄められてしまい、アクションリサーチが教師の個人的な成長のために行うものとして捉えられてきてしまったという。そして、筆者らは、批判的（critical）、省察（reflection）、協働（collaboration）というアクションリサーチにおける3つの重要なキーワードをもとに、アクションリサーチが本来あるべき姿の再検討を試みている。

「批判的」（critical）： 自らの実践が置かれている社会的状況、実践を形づけている「枠組み」を検証し、よりよいものへと再構成しようとする態度

「省察」（reflection）： 「批判的」に実践について考察すること

「協働」（collaboration）： 実践への参加者を実践研究に巻き込み、共に実践の改善へと向かうこと

(pp. 79-80)

香港における実践研究共同体の形成を目指して—
細川英雄・三代純平（編）
『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』

そして、これらの議論を踏まえて筆者らが主張する実践研究の立場は、「実践への参加者たちが協働で批判的省察を行い、その実践を社会的によりよいものにしていくための実践＝研究」（p. 80）であると結論付けている。

第3章では、実践を扱った2本の論文を題材に、筆者らが主張する実践研究の立場から、どう実践を記述し、どう公表するべきかを議論している。その指針は以下の2点である。

- (1) 教室の置かれた社会的文脈と実践の社会的意味を批判的に省察し、丁寧に記述する。
- (2) 一人称（「私たち」や複数の「私」を含む）を用いて、実践研究者の社会的立場や価値観を明確にし、同時にそれを批判的に省察し、その変遷を丁寧に記述する。

(p. 118)

理論編に続く実践編（第5-10章）では、この記述の指針に従いながら、実践が置かれた社会的文脈や筆者自身の立場、価値観が詳細に描かれ、それらを批判的に省察していることが窺える。この実践編は、実践をどのように記述すればよいのかという参考になるだけでなく、ストーリーとして描かれており、読み物としても大変興味深い。

筆者らは、このように立場を明確に表明したうえで実践研究を論じ、その具体例を読者に示してくれている。そして、「あとがき」でも述べられているように、7年にわたる本書の執筆自体が筆者らの「実践研究」だったのである。第4章では、「過去に私たちが実施した実践研究において、必ずしもここで主張されていることが認識され取り入れられてきたわけではない」（p. 121）と自身らを批判的に振りかえり、自らの実践研究に対しても省察が行われている。また、本書の理論編の執筆過程では、ワーキング・チームを作って理論的枠組みの議論を重ね、それを実践編の執筆者たちと共有していったという。そして、実践研究について批判的に議論を重ねることで、「実践研究共同体」（p. 95）が形成されたのではないかと考えられる。実践研究共同体が形成されることで、実践研究を通して得られた知見が「より広く、強く社会に影響を与えるようになる可能性がある」（p. 95）と筆者らは主張している。本書は日本語教育に新たな可能性や方向性を示すことに成功しており、筆者らがこのことを体現したと言えるだろう。

私は香港で日本語教育に携わる人々にも本書をぜひ読んでいただきたいと切望している。なぜなら、本書は香港の日本語教育にも大きなインパクトを与えてくれると考えるからである。特に、批判的、省察、協働という3つの実践研究・アクションリサーチにおけるキーワードは香港における実践を振りかえるうえで、大変有意義なものとなる。

まず、香港での教育実践をよりよい営みにするためには、自分自身が置かれている「社会的文脈」や「枠組み」の批判的検証を行わなければならないだろう。私は、香港で日本語教育に携わって6年になるが、その中で、「香港ではこうだから…」、「香港の学習者はこうだから…」、「うちの学校はこうだから…」という発言を現場の教師から聞くことが多々ある。だが、果たしてその香港、香港人、学校（組織）に対するイメージは適切なものであろうか？学習者を見くびり、学習者の実力以下の授業をしてはいないだろうか？学習者を自身のイメージの中に抑え込み、その枠を超えた新たな試みを避けてはいないだろうか？これらの「香港・香港の学習者」という枠組みを今一度批判的に再検討し、現地の社会的文脈を捉えなおさなければならないだろう。

また、他の人の実践をただ鵜呑みにして取り入れようとしたり、ルーティンとして無意識に日々の実践に取り組むのではなく、自らの実践も批判的に省察する必要がある。私は香港で勉強会に参加したり、主催したりするなかで、「文型の教え方」や「文型の導入法」など、実践の方法に関心を示す教師が多いと感じている。例えば、勉強会を主催するために現地の教師にアンケートをとると、必ずと言っていいほど「て形の教え方が知りたい」、「て形の効果的な練習方法が知りたい」、「文化の教え方が知りたい」といった声がある。もちろん、より効果的な教え方を取り入れ、自身の実践を改善していくことは重要だと私自身も感じており、決して現場の教師たちが方法を求めることを非難したいわけではない。だが、あまりにも方法にばかり目が向けられてしまい、方法の背景にある理念や考えがないがしろにされていないかと危惧している。方法の裏にある目的や理由を実践の主体である教師自身が明確に考え、示さない限り、実践は実体のない空虚なものとなってしまう。そうならないためにも、今一度自分自身の実践を振り返り、批判的な省察を行いながら、「なぜ」その方法を取り入れようとしているのか、「なぜ」その方法でなければならないのかを常に問い続けなければならないだろう。

最後に、香港の教育現場について共に批判的に語り合える実践研究共同体が形成される必要がある。多くの教師たちはより効果的な方法を探し求めているが、その方法を香港以外の文脈から得ようとばかりしているのではないかと感じている。例えば、日本や他地域から来る日本語教育の大学教員/専門家がありがたがられ、香港の現場で働く者の声が軽視されてはいないだろうか。現地の社会的文脈や実情を最も理解しているのは、現地で働く日本語教師たちであり、現場の視点から新たな試みを生み出すためには、むしろ現場の声に耳を傾ける必要がある。香港という社会的文脈で葛藤を抱きつつも試行錯誤を重ねている現地の仲間とともにもがきながら実践を改善していくことで、ボトムアップ的に実践を再構築していけないのだろうか。そして、教師にとどまらず、学習者やコミュニティ内の人々など実践に携わる者全てを巻き込んだ議論によって、地域全体をよりよくしていく日本語教育の営みが形成されていくのではないかと期待をしている。

香港における実践研究共同体の形成を目指して—
細川英雄・三代純平（編）
『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』

さて、このように考えていくと、本書で主張されている実践研究は、単に実践を記述し、公表したいと考える者だけが行うのではなく、全ての日本語教師たちが真摯に向き合う必要があるといえる。なぜなら今ある現地の「枠組み」は、現地の有力者によって作り出され、かれらにとって優位に働くよう組み込まれたものかもしれない、末端の現場の教師たちが不利益を被る形になっているかもしれないからである。その枠組みを無批判に受け入れ、従うことは、無意識のうちにそのような権力性や政治性に自らが加担し、改善する術を自ら放棄してしまっていることになりかねない。そうならないために、与えられたカリキュラムがある中でも、現場に携わる教師たちは、自身の置かれた社会的文脈や枠組み、自身の教育実践を批判的に省察し、「なぜ」自分が日本語を教えているのかという問いと日々向き合っていかなければならないだろう。そうすることで、香港の現場からもよりよい社会を形成する営みが生まれるのではないかと私は信じている。

文献

細川英雄・三代純平（編）（2014）『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版

目次

序 今なぜ実践研究なのか—言葉の教育の課題と展望（細川英雄）

第1部 理論編

第1章 実践研究はどのように考えられてきたか—日本語教育における歴史的変遷（市嶋典子・牛窪隆太・村上まさみ・高橋聡）

第2章 新しいパラダイムとしての実践研究—Action Research の再解釈（三代純平・古屋憲章・古賀和恵・武一美・寅丸真澄・長嶺倫子）

第3章 社会に埋め込まれた「私たち」の実践研究—その記述の意味と方法（三代純平・古賀和恵・武一美・寅丸真澄・長嶺倫子・古屋憲章）

第4章 「実践の用語」と「理論の用語」—実践研究における論文のあり方を再解釈する（牛窪隆太・武一美）

第2部 実践編

第5章 介入する他者、つなぎ目としての多文化教育コーディネーター—高等学校における実践研究共同体創出の可能性（武一美・井草まさ子・長嶺倫子）

第6章 「イベント企画プロジェクト」の挑戦—実践共同体が立ち上がるプロセスに埋め込まれた共生のための言語活動（古賀和恵・古屋憲章・三代純平）

第7章 日本語学校におけるカリキュラム更新—大学院進学クラスの継続的な実践がもたらしたもの（佐藤正則）

第8章 参加者の生活・人生にとって教室実践活動はどのような意味をもつのか—教室の外からの視点（高橋聡）

第9章 結節点を結ぶ—「あの実践」の手ごたえと価値をめぐって（山本冴里）

第10章 「生きることを考える」ための実践研究—高等教育機関における教師養成のあり方をめぐって（山本晋也・細川英雄）

あとがき—希望をつなぐ（三代純平）